

【資 料】

継続看護を学ぶ中国人看護職研修生の研修プログラムの検討

Discussion of the Training Program of the Chinese Nursing Profession for the Continuing Nursing Care

田中 克子¹⁾, カルデナス暁東¹⁾, 楊 輝²⁾

Katsuko Tanaka¹⁾, Xiaodong Cardenas¹⁾, Hui Yang²⁾

キーワード：継続看護，研修プログラム，中国人看護職者

Key Words：continuing nursing care, training program, chinese nursing profession

I. はじめに

日本では高齢化社会や慢性疾患患者の増加に伴う在宅医療の推進が求められていることから、厚生労働省の報告において医療介護の提供体制として、住まい・医療・介護・予防・生活支援が継続的に一体的に提供される地域包括ケアシステムの実現とその推進を説いている（地域包括ケア研究会報告書，2009）。したがって、現在、各地域において地域包括システムの実現に取り組んでいる。

中国においても、慢性疾患患者の増加と高齢化（内閣府，2017）の状況は日本と同様であり、病院から在宅へと継続的な医療・看護の確立の必要性が推察される。しかし、中国では継続的な医療・看護の確立の実現に向けた、人材育成、システムの構築、サービス内容の質の向上等の課題が多い（姜波，2011）。

その現状を踏まえて、中国山西省にある山西医科大学第一附属病院看護部が病院から在宅への医療と看護を継続して提供できる拠点づくりのために、同じ文化圏で継続看護を推進して取り組んでいる日本での研修を希望された。本学看護学部慢性期成人看護学領域は、看護学実践研究センターの依頼を受け、

2016年度から研修を引き受けることになった。

なお、2016年度の研修は、中国側の意向もあり、中国ではまだ整備されていない訪問看護ステーションで行った。研修目的は「医療と看護を継続して提供できる拠点である訪問看護ステーションで看護実践を体験し、組織運営・人材育成の特性について学ぶ」とした。研修期間は10週間であった。研修内容は表1に示す。

今後、本学が外国人研修生の受け入れを推進するための基礎資料として、2016年度の継続看護を学ぶ山西医科大学看護職者の研修生受け入れプログラムを振り返り、その課題を明らかにすることを目的とする。

II. 方法

中国では、新しいプロジェクトの意思決定においては責任者が決定権をもち、トップダウンで展開する状況がある。したがって、この研修は中国側が継続看護の拠点づくりに新たに取り組むという計画であるので、今回派遣元の責任者と受け入れ側である本学教員が2016年度の研修を振り返り、2017年度の研修の要望に向けて意見交換を行った。

1) 大阪医科大学看護学部，2) 中国山西医科大学附属第一病院・山西医科大学看護学部

表1 2016年度研修プログラム内容

期間	プログラム内容
1 週間	【研修前オリエンテーション (大学)】
8 週間	【研修施設における研修】 1. 訪問看護に見学同行 (延 28 事例) ①関連資料の収集等 ②訪問看護事例の看護実践の計画立案等 <大学において研修プログラムの進捗状況の確認> (中間まとめ) 2. 多職種連携, 退院調整, 組織運営・人材育成の理解 ①地域における多職種連携交流会に参加 ②退院に向けての調整, 医師の往診の同行, 退院の初回訪問等 ③研修指導者の臨床講義の受講を受け研修施設の運営, 組織の概要, 人材育成等
1 週間	【研修後まとめ (大学)】

1) 担当者間による2016年度の研修プログラムに関する意見の収集

2017年3月から8月にかけてインターネット通信, 電話で4回行った。「2016度の研修プログラムの良かった点」「2017年度の研修プログラムへの要望」に関して意見交換をした。

2) 分析

意見交換した内容を逐語録にして「2016度の研修プログラムの良かった点」「2017年度の研修プログラムへの要望」に分類した。意味内容を共通性・類似性のある内容どうしをまとめ, 共通した内容ごとに分類して要約した。

Ⅲ. 結果 (表2, 3) 【】は要約, 「」は内容とする。

良かった点として, 【病院内から在宅へと看護の視野が広がる】として「病院内に限定されていた看護の視点が, 在宅看護へと視野を広めることができた」, 【見学同行実習は理解しやすい】として「訪問看護においては生活に即した看護を提案する必要性を理解できた」, 【利用者の希望の実現をスタッフ全員が共有する】として「利用者の希望を最大限に実現することをスタッフ全員が共有することが重要であることを学んだ」という内容であった。【生活に即し, 利用者主体, 自律性を重視した訪問看護の特質を学ぶ】として「訪問看護は利用者の自律性を重視した看護であることを実際見学して学ぶことができた」「見学同行実習を通じて研修生が理解できる

看護実践場面が多かった」「訪問看護の援助の特性である利用者主体の看護を学んだ」という内容であった。

一方, 要望としては【多職種連携, 地域連携に関する理解を深めたい】として「大学病院, 療養病院等との連携を構築しようとしているので各施設の役割を知りたい」「日本の制度の理解を踏まえた病院と地域をつなぐ継続した看護に向けたシステムについて, 理解を深めるようにしたい」「多職種連携, 退院調整, 組織運営・人材育成の理解に関しては, もっと実際を見学する機会を増やし理解を深めたい」という内容であった。【訪問看護に関する理解を深めたい】として「日本の訪問看護ステーションの制度の背景について理解を深めたい」「訪問看護利用者の生活史, 家族との関係にもっと理解を深めたい」「訪問看護の組織運営, 人材育成に関してもっと理解を深めたい」という内容であった。【継続看護に関して理解を深めたい】として「継続看護の実際に関してもっと理解を深めたい」という内容であった。

派遣元の責任者と受け入れ側である本学教員の意見交換を行った結果, 以下のことが明らかになった。訪問看護ステーションの看護に関しては実際に見学することを通じて, 訪問看護の理解を深め看護の視野を広めることはできたことは良かった。しかし, 日本の訪問看護ステーションの制度の背景, 組織運営や訪問看護利用者の生活史, 家族との関係, 社会

表2 2016度の研修プログラムの良かった点

要約	内容
病院内から在宅へと看護の視野が広がる	病院内に限定されていた看護の視点が, 在宅看護へと視野を広めることができた
見学同行実習は理解しやすい	見学同行実習を通じて研修生が理解できる看護実践場面が多かった
利用者の希望の実現をスタッフ全員が共有する	利用者の希望を最大限に実現することをスタッフ全員が共有することが重要であることを学んだ
生活に即し, 利用者主体, 自律性を重視した訪問看護の特質を学ぶ	訪問看護は利用者の自律性を重視した看護であることを実際見学して学ぶことができた
	訪問看護の援助の特性である利用者主体の看護を学んだ
	訪問看護においては生活に即した看護を提案する必要性を理解できた

表3 2017年度の研修プログラムへの要望

要約	内容
多職種連携, 地域連携に関する理解を深めたい	大学病院, 療養病院等との連携を構築しようとしているので各施設の役割を知りたい
	日本の制度の理解を踏まえた病院と地域をつなぐ継続した看護に向けたシステムについて, 理解を深めるようにしたい
	多職種連携, 退院調整, 組織運営・人材育成の理解に関しては, もっと実際を見学する機会を増やし, 理解を深めたい
訪問看護の制度・運営・人材育成等, 利用者や家族に関する理解を深めたい	日本の訪問看護ステーションの制度の背景について理解を深めたい
	訪問看護利用者の生活史, 家族との関係の理解をもっと深めるようにしたい
	訪問看護の組織運営, 人材育成に関してもっと理解を深めたい
継続看護に関して理解を深めたい	継続看護の実際に関してもっと理解を深めたい

的背景等, さらに広域的に, 医療・介護機能の連携とその役割, 多職種連携, 退院調整, 組織運営・人材育成等, 継続看護の実際の概要に関してもっと理解を深めたいという要望であった。

IV. 考察

1. 研修プログラムの振り返り

2016年度の研修プログラムは訪問看護ステーションが研修の中心であったため, 訪問看護ステー

ションに意見が偏るのは当然であると考え。良かった点の内容にある「患者の希望を最大限に実現することをスタッフ全員が共有すること, 利用者が主体性をもって生活すること, また, 訪問看護は利用者の自律性を重視した看護であることを実際見学して学ぶことができた」から, 訪問看護をする上で重要な援助である「在宅療養者の意志の尊重, 在宅療養者, 家族の実情に応じた支援, 在宅療養生活の継続を支援する連携や協働」(川上他, 2012)に関

して理解が深まったと考えられた。その理由として研修生も看護職者であったので、見学同行実習が効果的であったと思われる。

一方、中国における継続看護の課題として、医療保険制度と医療費負担の課題、人員不足、医療介護の連携が挙げられ、日本の病院から在宅へと継続的な医療・看護の確立のための人材育成、システムの構築、サービス内容を活用できる需要は高い（地域包括ケアシステムの国際展開推進コンソーシアム、2017）と報告されている。このことは、中国の派遣元の責任者が日本の訪問看護の制度の理解や利用者の社会文化的背景、医療・介護機能の連携とその役割、退院調整、人材育成等の理解をより深めたいという要望と一致すると考える。したがって、中国で日本の継続看護の研修が活用される可能性が高いと推測される。

以上のことから、2016年度は看護の視野が広がり、訪問看護の特質の理解はされたが、研修目的である継続看護における訪問看護ステーションの位置づけや訪問看護ステーションの組織運営等を理解するには十分ではなかったと考えられる。

2. 研修プログラムの課題

研修プログラムへの要望が、多職種連携、地域連携と訪問看護に関する理解を深めたいということから、訪問看護ステーションの場だけの研修では、継続看護の概要を理解するのは困難であったと想像される。したがって、特定機能病院、回復期・療養医療等と在宅を繋ぐ医療を実践するケアミックス型病院、在宅看護の拠点である訪問看護ステーションのように病院から在宅へと継続的な医療・看護の実際が理解できるように、施設の特徴ごとに実習場所を設定したほうがよかったのではないかと考える。さらに、日本の社会的背景や制度に関しても、見学した実際とその意味づけをする時間をプログラム化しなかったことが、理解が深まらなかった一因であると考えられる。特に訪問看護ステーションの利用者の生活や家族の理解などに関しては、日本の文化的背景を理解することが重要となる。日本の文化、社会等を理解することへのプログラムも不足していたと考える。また、組織運営や人材育成に関しても

日本と中国の法律や制度も異なるので、それを踏まえたオリエンテーションの必要性も感じた。

以上のことから、研修プログラムの課題として日本の文化や制度の理解の下、拠点である病院、療養型病院、看護外来、地域連携、訪問看護といった多様な場所、そして見学場面の意味づけが、組織運営・人材育成の理解を深める上でも重要であると考えられる。

文献

- 川上嘉明，金井一薫（2012）：地域ケアを担う看護師が期待する看護の能力—地域で活動する看護師への調査から—，東京有明医療大学雑誌，4，17-27.
- 姜 波（2011）：中国全土に推進される在宅介護サービス事業の現状と課題，川崎医療福祉学会誌，21(1)，1-9.
- 内閣府（2017）：http://www.esri.go.jp/jp/prj/int_prj/2011/prj2011_01.html.2017.3.10
- 地域包括ケア研究会 報告書 ～今後の検討のための論点整理～（2009）：<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2009/05/dl/h0522-1.pdf>.2017.7.4.
- 地域包括ケアシステムの国際展開推進コンソーシアム（2017）：平成28年度医療技術・サービス拠点化促進事業（中国における地域包括ケアシステムの構築推進事業）報告書，82-85.